

口は健康のもと Vol.139

知覚過敏 ～症状次第で異なる治療～

“歯がしみる”という症状に代表される知覚過敏症……その原因はむし歯、歯の損耗・亀裂、歯周病です。発生しやすいのは利き手と反対側の上顎の犬歯から小臼歯部で、この部位は最も歯を磨きやすく過度の横みがきの影響で歯茎付近の歯質がくさび状に削れて象牙質が露出します（くさび状欠損）。また、咬む力による歪みで歯質が崩壊する現象も欠損の一因とされます。高齢者の多くは歯周病に罹患し、歯茎の外に歯根が露出します（歯が伸びたように見える）。歯根表面のセメント質は、弱く薄いためすぐ摩耗して象牙質が露出します。

象牙質には歯の神経組織（歯髄）まで通じている象牙細管があり、これが開いた状態になると外来刺激が歯髄に伝わって痛みとして認知されます。知覚過敏の歯の歯髄（神経組織）はほぼ健康な状態なので自発痛はなく、歯ブラシや冷水による刺激で鋭く不快な痛みを生じます。この痛みは通常1分以内に消失しますが、1分以上持続するようになると歯髄は化膿性炎症に陥っています。むし歯による知覚過敏では歯髄が細菌感染していると判断されます。

知覚過敏の治療は、症状の変化を診ながら段階的に行うため劇的に状況が改善するとは稀です。初めは歯口清掃指導、患部へフッ化物などの塗布、咬合負担の調整、次にプラスチックやセメントによる患部の被覆と進み不快症状の改善を図りますが、改善できない場合は歯髄を除去することになってしまいます。



奥羽大学歯学部附属病院

総合歯科 准教授 菊井 徹哉

